

大阪YWCA、関西韓国YMCA、大阪YMCA 合同祈禱会

「自由と平等に生まれて一神に祝福された人権」



世界YWCAもこのことを覚え、「世界YMCA・YWCA合同祈禱週」のテーマを「自由と平等に生まれて一神に祝福された人権」と定め、世界に思いを馳せ、共に祈る集いを持つことを勧められています。

2008年度世界YMCA・YWCA合同祈禱週のテーマは「自由と平等に生まれて一神に祝福された人権」です。

2008年12月10日に、世界人権宣言は採択60周年を迎えました。人間としての尊厳を守り、差別と抑圧を阻止するため、1948年に第3回国際連合総会で、この宣言を採択しました。世界YMCA同盟・世

大阪の釜ヶ崎(西成区)には、約2万人の日雇い労働者が簡易宿泊所などに住んでいます。雇用の減少や高齢化により、職を失った多くの労働者が路上生活を余儀なくされ、行き倒れとなるケースもあります。約20年前、当時カトリック・フランシスコ会の日本管区長をつとめていた本田神父は初めて訪問されました。

2008年度世界YMCA・YWCA合同祈禱週が大阪YMCA会館にて行われました。第1部は世界YMCA・YWCA合同祈禱週のテキストに従い、聖書の箇所を参加者とともに交読しました。

説教は「愛することよりも大切にすることを求めたい」と題して、カトリック・フランシスコ会「釜ヶ崎ふるさとの家」の本田哲郎神父にいただきました。

は無理だと言われます。そうではなくて、イエス様が示されたのは「全ての人に、相手をその人として大切にしよう」ということであると、語られました。

この地で宗教者としての転機となる体験をした本田神父は、同会の運営する「釜ヶ崎ふるさとの家」を拠点として長年にわたり労働者たちの支援に携わり、従来からのキリスト教理解を根本から問い直すことに取り組んでおられます。

本田神父は、「家族や恋人への愛情」「エロス」や、「友人や仲間への友情や信頼」「フィリア」を全ての人に対して持つ、ということ

国際リレーエッセイ⑤
風の人の土の人
～ザンビアより～
滝沢祥子さん

なかりをザンビアYMCAでも作り、10年、50年後につなげていってほしいと。



また、最後に関西韓国YMCAの舞踏の先生による韓国舞踊「イプチュム」が披露され、交流会は盛会のうちに終了しました。

(内田弘志・統括本部スタッフ)

失っていくもの・伝えていくもの

し、仕事が決まったり、資金のめどがたつて急に学校に行けるようになる、昨日まで来ていたメンバーが来なくなるといのは日常茶飯事でした。

活動を開始し1年が経つ頃、私は日本の「Y子」の存在を紹介し、YMCAのシステムを話しました。ジュニアメンバーとして

核家族化が進む日本。だからこそYMCAのような世代のつながりを持つ場所が必要なのだ。日本が失いかけていくものをこそザンビアで見たような気がしました。また、ザンビアが発展していく中で失っていくものは、日本がかつて失ってきたものだ。そんな中で私たちが担う役割を考えなくてはならないのではないのでしょうか。

開村6年目を迎えた紀泉わいわい村。今年度も2008年11月3日(月・祝)に収穫感謝祭を盛大に開催することができました。当日は3連休の最終日にもかかわらず、開始時間の前より続々と参加者が詰め掛け、約2500名の方に「米村



紀泉わいわい村 収穫感謝祭

とに感謝いたします。

いただきました。当事業は自然への恵みに感謝し、「食する」ことの大事さと楽しさの体感、環境への配慮を願って実施されています。

食するということの秋の珍事(？)が起きました。ステージプログラムでは、南京玉簾での愉快なやり取りや、子どもたちの皿回し体験、南国情緒たつぷりのフラダンス、古き良き時代の琴や尺八・オカリナの演奏、子どもに人気の紙

クラフト、ペーパークラフトなどに多くの人が楽しんで参加されていました。これらのプログラムは泉州地域を中心に活動されている様々な団体の皆様にボランティアで参加していただきました。多くの方々に支えられ、今年も無事に開催できたことを感謝いたします。



た。また、わいわい村産の粟・米を使つての粟ご飯、もち米を使つての餅つきコーナーにも長い行列ができて大盛況でした。そしてわいわい村名物の大釜での千人豚汁(約1300食)も好評で、開村以来初めて完

芝居、キャンプソング等を参加者と共に歌つた楽しい音楽隊など、収穫感謝祭にふさわしい華やかなステージとなりました。

今回初めての試みとしてわいわい村無料宿泊券やわいわい村産お米、ピザ・バウムクーヘン無料券が当たる大抽選会を行いました。抽選券販売の収益金は、国際社会奉仕活動に捧げさせていただきます。

これからも地域の方々と共に、この自然豊かで、日本人が懐かしさを覚え、心和む紀泉わいわい村を、多くの方に親しんでいただけるよう活動していきます。(橋本恵典・紀泉わいわい村スタッフ)



配属先であった首都ルサカのYMCAに行つて目にした光景に私は目を疑いました。そこには子どもたちが一人もいなかったのです。日本のYMCAでユースリーダーを経験していた私は日本でのイメージのままで行つたのですが、ザンビアでは青年自身が自分たちのための活動・行事だけを企画・運営していたのでした。しかし、仕事が決まったり、資金のめどがたつて急に学校に行けるようになる、昨日まで来ていたメンバーが来なくなるといのは日常茶飯事でした。

でも多く、上の子が下の子の世話をする、または近所の子の世話をするのは当たり前です。また、おもちやを買うのではなく作るもの。ビニール袋を何枚も重ねたボールと石4つでゴールを作りサッカー

◆筆者紹介◆
滝沢 祥子さん
元枚方YMCAユースリーダー。青年海外協力隊として2年間ザンビアで活動し、今夏帰国。